

Title	<書評> James A. Aho, "The Politics of Righteousness ; Idaho Christian Patriotism, University of Washington Press, 1990
Author(s)	渡邊, 太
Citation	年報人間科学. 19 P.292-P.297
Issue Date	1998
Text Version	publisher
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/4199">https://doi.org/10.18910/4199</a>
DOI	10.18910/4199
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

James A. Aho,

*The Politics of Righteousness ; Idaho Christian Patriotism*

University of Washington Press ,1990

渡邊 太

一九七〇年代半ば、アメリカでは右翼テロリズムの終結が楽天的に語られていた。だが、一九八〇年代に入ると、保守主義のリバイバルとともに極右運動は息を吹き返す。極右運動は、アメリカ史において繰り返し登場するが、その実像は正確には認識されていない。右翼思想の多くは、キリスト教の理念を掲げる。それゆえ、これらの運動はキリスト教愛国主義運動と呼ばれる。

マス・メディア上では、極右運動のメンバーは「憎悪に癡り固まったネオ・ナチ」として、しばしば一面的なイメージで描かれる。その一方で、極右運動についての社会学的なフィールド調査は、ほとんど行われていない。宗教と暴力の関係を専門として研究する社会学者ジェイムズ・アホーは、二次的資料に依拠せずに、アイダホをフィールドとして積極的に極右の世界に足を踏み入れた。アイダホを選んだ理由は、キリスト教愛国主義グループの大部分がアイダホに基盤を置いているからである。その研究成果が、本書『正義の政治学—アイダホのキリスト教愛国主義—』である。自由な会話形式による非構成的インタビューを軸としたアホーの研究は、極右運動の実像を初めて描き出したという点だけでも、十分に有意義であると言えよう。

キリスト教愛国主義の世界を、いかにして理解可能な形で記述するかが本書の第一の課題である。アホーはキリスト教愛国主義運動を理解するために、内在的理解と外在的理解の二種類の戦略を用いる。本書の第一部は、キリスト教愛国主義運動の世界観を内在的に理解することを目的としている。第二部では外在的理解として、キ

リスト教愛国主義運動についての因果的分析が試みられる。運動を内側と外側の両方向から見ることによって、アホーは、キリスト教愛国主義を一面的でない方法で理解することを意図している。しかし、内在的理解には困難な問題がはらまれている。対象に外在する視点を放棄することなく、信仰を内在的に理解することは可能であるのか。アホーの研究は、この問題に取り組むための出発点になりうるだろう。

アホーによる内在的理解の試みは、「敵」をめぐる考察を基軸として展開されている。アホーによれば、あらゆる宗教は「敵」をつくり出す（八八頁）。「敵」をめぐる観念によって宗教的世界観が形作られ、「敵」に対する共通の感情が人びとを連帯させるのである。

キリスト教愛国主義者は、「敵」との戦いを「正義の政治学」として表現する。「正義の政治学」の中心的な主題は、神の支配の転覆をもうろむサタンとの戦いである。それゆえ「敵」の創出は、「正義の政治学」を規定する根本原理となる。急進的な愛国主義者の一部がテロリズムなどの暴力行為を引き起こすのは、彼らが「邪悪な意図」をもっているからではない。むしろ「良い意図」の実現を望むからこそ、結果的に暴力手段に訴えてしまうのだ。より大いなる善のためには、犠牲もやむを得ないというわけである（八一頁）。キリスト教愛国主義者からすれば、現代アメリカ社会の墮落はサタンの陰謀による。人種的・民族的マイノリティの平等権、世俗的ヒューマニズム、ボルノグラフィ、同性愛、人工妊娠中絶、犯罪、高利貸しといった道徳侵害がサタンの陰謀の指標とされる。キリス

ト教愛国主義の目標は、キリスト教の価値とアメリカニズムの保持である。思想的に見れば、キリスト教愛国主義者は保守であるが、彼らは目的実現のためには革命的手段の使用も辞さない。神の秩序を実現するためには、「敵」を葬り去らねばならないのである。

「狂信的なネオ・ナチ」という極右のメディア・イメージは、アホーが実際に会って話した極右の印象と一致しなかった。「憎悪」、「ナチ」、「狂気」といったカテゴリーは単なる行為の記述ではなく、特定の行為者に対する中傷を暗に意味している。極右運動のメンバーは、マス・メディアから「ヘイト・グループ」と呼ばれることを嫌う。彼らの言い分によれば、極右は、黒人や東洋人を憎んでいるわけではない。彼らは自分の人種を愛しているだけなのだ。他の人種を排除しているように見えるのは、彼らの人種（白人クリスチャン）が他の人種（黒人や東洋人、メキシカン）によって脅かされている事態に危機感を感じているからである（六九頁）。キリスト教愛国主義の根源には、憎悪ではなく、愛があるのである。

想定される敵の種類に従って、キリスト教愛国主義は、「アイデンティティ・クリスチャン」と「キリスト教憲法主義者」とに、理念的に分類される（一七頁）。「アイデンティティ・クリスチャン」は「ユダヤ人」を敵と想定する。「キリスト教憲法主義者」は、彼らの敵として特定の人種の民族的グループを明示することを好まず、「内部者」といった抽象的なカテゴリーを使用する。

「アイデンティティ・クリスチャン」の起源は、新しいエルサレム、神との契約者としてのアメリカという理念に求められる。この

理念はアメリカの歴史的経緯に深く関わっている。国家としてのアメリカの起源が、地上における神の国の実現というキリスト教的理念に基づいているからである。「アイデンティティ・クリスチャン」の世界観の基本的な構成要素は、二元論、陰謀説、悪の象徴としてのユダヤ人、アングロ・イスラエル主義（ユダヤ人ではなくアングロ・サクソンこそがイスラエル神の民であるという思想）である。二元論において、世界は善と悪、神とサタン、光と闇といった二項対立図式で構成される。神の側では、清潔、純粹、清浄が、サタンの側では、病原菌、ウイルス、バクテリア、病気がシンボルとして用いられる。陰謀説は歴史解釈の枠組みとなる。歴史の背後には、何ものかの意志（サタンの陰謀）が働いており、それが現代社会を墮落へと導いた。陰謀の首謀者はユダヤ人である。サタンを打倒し新しい秩序を担うのは、神に選ばれた白色人種において他にない。白人キリスト教徒の優越性は、独特の語源学、占星学、数秘学によって証明される。だが、その証明はトートロジーである。すなわち、「我々は神に選ばれた民である。なぜなら我々は神の恩寵を賜っているからだ。我々が神の恩寵を賜っていることは、我々が選ばれた民であることから明らかである」という論理である（一一三頁）。

「キリスト教憲法主義」は、一九七〇年代前半の徴税政策に対する抵抗運動に端を発する。多くのアイダホ人は、憲法が保証する個人の自由が、徴税政策によって侵害されていると感じた。これらの徴税政策への抵抗運動が「キリスト教憲法主義」の源流である。「キリスト教憲法主義」の一つであるジョン・バーチ・ソサエティは、

モルモン教（末日聖徒イエス・キリスト教会）の教義とジョン・バーチ・ソサエティの政治的目標の平行性を主張し、モルモン教徒からのメンバークーリエを企てた。モルモン教は、極右を公式には承認してはいないが、結果的にその動員の受け皿となった。モルモンの教義に含まれている愛国主義的要素としては、アメリカとイスラエルの同一視、善と悪の二元論、陰謀説などがあげられる。「モルモン書」においてユダヤ人は好意的に記述されており、このようなモルモン教の要素を受け継いだために、「キリスト教憲法主義」は、憎悪をユダヤ人ではなく抽象的な敵に向けてることになったと考えられる（一一三頁）。以上が第一部で記述されたキリスト教愛国主義運動の概要である。つぎに第二部で、アホーは極右運動についての社会学理論を検討する。

極右に関する社会学理論の主なものとしては、極右運動への参加の原因を、公教育の欠如に帰属させる教育理論とコミュニティ（地域だけに限らず、結婚や職業、宗教参加、政治参加も含む）からの疎外に帰属させる大衆理論がある。インタビューに基づくアホーの検証によれば、少なくともアイダホにおいては、教育理論と大衆理論は適用できない。アホーの収集したデータからは極右運動参加者が一般のアメリカ人よりも教育程度が低いという証拠は得られなかった（一四〇頁）。また、コミュニティからの疎外は、運動参加の原因であるというよりも、その結果であると考えられる（一六二頁）。これらの理論に取って代わる説明として、アホーは政治的社會化理論を提起する。政治的社會化理論によれば、極右運動への参加には、

子どものときに受けた宗教教育が影響している。実際、アホーが調査したアイダホの愛国主義者のサンプルの八〇・五パーセントがプロテスタント教会での宗教教育を受けていた（二六六頁）。教義的には両者は親和性をもつ。聖なる存在の絶対的な超越性、現世の罪の強調、女性嫌悪、世俗内禁欲、陰謀説、天啓史観は、両者に共通の要素である。さらに詳しく見れば、「アイデンティティ・クリスチャン」の五九・六パーセントがプロテスタント・ファンダメンタリストの宗教的背景をもつのに対して、「キリスト教憲法主義者」の六五・四パーセントがモルモン教の宗教的背景をもつ（一七五頁）。ユダヤ人問題をめぐる両者の態度に見られる差異は、宗教的な育ちの違いに由来すると推定できる。一般化して言えば、現在の宗教選好は過去の宗教的背景によって決定的に影響されるといふことである。

しかしながら、極右の宗教的背景を明らかにするだけでは、なぜ彼らが極右運動に参加するのかを説明したことにはならない。「アイデンティティ・クリスチャン」に参加しないファンダメンタリストや、「キリスト教憲法主義」に参加しないモルモン教徒の方が、圧倒的に多数を占めているからである。そこでアホーは、動員の多段階理論と資源動員論を援用する。極右運動への動員は、身近なオピニオン・リーダーを通じて行われる。極右のメンバーと接触のある個人は、極右運動に参加する機会をもつことになる。彼らが運動に参加するかどうかは、個人の合理的選択による。行為者は、運動参加から得られる見込みのある集合財および私的財とその獲得にか

かるコストとを考慮した結果、利得を最大化するように合理的に選択する（二九一頁）。アホーの理論は簡明であるが、極右運動についての社会学理論として有意義である。なぜなら、従来の社会学理論は、「孤立した憎悪者」という極右のメディア・イメージを無批判的に前提していたので、極右メンバーの社会的接触に目を向けなかったからである。

最後に、そもそもなぜこのような極右運動が発生したのかという問題が残されている。運動参加を説明することと、運動の発生を説明することは別の問題である。アホーは、アメリカにおける極右運動の周期に着目する。アメリカでは約三十年ごとに極右運動の興隆が見られる。この周期と経済的周期とを関連させて、社会的地位を脅かされた階級が、上昇しつつある階級の台頭に抗して文化的伝統に固執すると仮定する地位置き換え理論は、アメリカ史の事実と合致しない。極右運動は、地位を脅かされた階級の怯えた反応ではなく、上昇しつつある階級の自信の現れなのである（二一六頁）。そこでアホーは、カール・マンハイムの政治世代概念に依拠する。極右の周期は、経済周期よりも政治周期に関係する。各世代は政治参加後最初の十五年を既存の権力との闘争に費やす。その後十五年間権力を握り、また次の世代に打倒される運命にある。政治世代は特定の歴史的出来事を共有することによって形成される。極右運動世代に共有された歴史事象は、没落するリベラリズムの体験である。この世代体験に基づいて彼らは既存の権力に挑戦しているのだ（二二三頁）。

以上のように、第二部においてアホーは、政治的社會化理論、機會構造論、資源動員論、政治世代理論を駆使してキリスト教愛国主義運動を分析する。だが、すべての理論的問題が解明されたわけではない。アホーは運動の発生を政治世代概念によって説明する。けれども世代概念を用いると、再び、なぜ同じ政治世代に属するにも関わらず極右運動に参加する個人と参加しない個人とに分かれるのかという問題が浮かび上がってくる。アホーによれば、星条旗と憲法への愛着はアメリカ国民に共通の感情であるという。しかし、これらの共通感情と極右の理念との間に存在するギャップをアホーは説明していない。この問題が従来の社会学理論によっても説明できなかったことは、アホーが検証したとおりである。

これは内在的理解に関わる問題である。アホーはキリスト教愛国主義の世界観を具体的に描くことで、彼らの世界観を内在的に理解しようと試みた。しかし、キリスト教愛国主義の世界観がどのようなのかという問題と、それがいかにして信奉されているのかという問題とは次元を異にする。後者の問題こそ、宗教の内在的理解にとって本質的である。あるいは「正義の政治学」をめぐるアホーの考察は、この問題についての一つの解答の方向性を示唆しているのかもしれない。「悪」を措定し、「敵」を創出した宗教集団は、それらの「敵」との戦いを英雄主義的に意味づける。この理念を神学的に突き詰めた結果が、「正義の政治学」である。しかし神学上の議論を追うだけでは、内在的理解とは言えない。このような公式教義上の展開と、それを信仰する諸個人の私的事情とがいかに結びつ

いているかが問題となるのである。したがって、両者のつながりを外在的条件からだけでは説明することが宗教社会学の課題となるだろう。そこに、社会学の文脈における宗教の内在的理解の可能性が存する。

ある特定の「敵」の創出に関わる論理や文化的出自を理解できたとしても、そうして創出された「敵」を敵と見なし、その敵との戦いを神聖な戦いとして実際に戦うことまでは、完全には理解できない。教義の理解とその実践との間には断絶がある。それは、ときに信仰者と非信仰者との間の断絶として表現される。けれども、信仰者と非信仰者との間には、ほんとうにそれほどの深い断絶があるのだろうか。信仰者どうしの間では、理解が共有されているのか、それとも、たとえ同じ神を信ずる者どうしであっても、信仰を完全に理解し合うことはできないのか。これらの問題を考察するためには、抽象的な議論ではなく、アホーがしたように、具体的な事例を掘り下げていくという方法こそが、有効な手続きである。個人的な体験と特定の宗教の教義実践との関わり合いを、宗教に内在する形で描くことが、信仰の理解という課題に取り組むための出発点となる。

信仰を内在的に理解するためには、外在的な理解の限界にまで到達しなければならぬ。それは、抽象的な議論によっては不可能である。なぜなら、言葉の上での理解の果てに内在的理解の問題が現れるからである。そこでは、研究者自身の宗教に対する姿勢が問われることになるかも知れない。否、自身の信仰を問うことなしに信仰の内在的理解を探究することはできないのだ。本書において、ア

ホーは、内在的理解と外在的理解とを対置しているが、「正義の政治学」という概念に両者の統合の可能性を見出すことができる。それは、アホー自身の宗教に対する姿勢に基づく一つの方法である。